

「この人はタイ わしはハモヤ」

増山雄三

大阪湾の南の入口にあたる紀淡海峡で、淡路側に位置しているのが「由良」で、潮流の速い好漁場に面しながらも、まるで防潮堤のようになり、南北三□にわたって延びる「成ヶ島」のお蔭で、漁港のある洲本市の「由良港」には、穏やかな海が広がっている。

まるで、ラグーンのような天然の良港は、明治三十二年（一八九九年）から、紀淡海峡の対岸である和歌山市加太港まで、旅客船が運航されていたがすでに廃止され、現在は、成ヶ島への「渡し船」があるだけで、貨物港と漁港としての機能が主になっている。

今では、瀬戸内海国立公園の一部になっている無人島の成ヶ島へは、先の渡し船に乗ればわずか二分でいけ、一応運行ダイヤはあるが、渡りたいと申し出れば、すぐに船を出し

てもらえる手軽さだ。

そこで、高台から眺望を楽しもうと、標高が約五十米の「成山」の展望台へ登ってみると、成ヶ島の砂洲の様子が手に取るように見えると共に、「淡路橋立」の異名を持つように、展望台にある生石公園の小高い場所からは、島から長く伸びる半島も見える風景明媚なところで、遠くには漁船のエンジン音が響き、漁港の活気も伝わってくる。

由良という所は、奈良時代に南海道が整備されると、海上交通の要衝として栄え、江戸時代の初期には、池田忠雄が、成ヶ島に「成山城」を築城して城下町となった。

その後、由良引けで洲本に城を移し、城主の蜂須賀氏が由良湾の北側に水路が開削すると、江戸大坂を結ぶ菱垣廻船の重要な寄港地になり、明治に入ると、由良要塞の司令部が由良の町に置かれ、砲台や堡塁が成ヶ山にも築かれて、由良港一帯が要塞となっていた。

いま、由良の町は、海岸沿いの県道の一本

内陸側に通っているのが、かつてのメインストリートで、車がかろうじてすれ違えるほど狭い道幅だが、小型船しか入れない船溜まりが残っていて、鮮魚店が点在するなど、漁師町の風情が色濃く感じられる。

ここで鮮魚店を営む「いわの水産」の大将は、この近海は潮流が速く、気候も温暖なことから質の良い魚介が豊富に獲れ、その中でも、由良港は良質な魚介が水揚げされる所として定評があると教えてくれた。

そして、いわの水産の前を通る道を歩いてみると、由良に一軒だけ残る銭湯が見えてきて、表には、屋号も営業時間も書かれていないが、夕方を待ってそこを訪れると、既に暖簾がかかっており、無事に入浴もできた。

とびきり熱い湯に気合を入れてつかっている、七十年代とおぼしきオッサン達が、次々とやってきて、楽しそうに話す内容に耳を傾けていると、どうやら、彼らはこの地の漁師らしく、独特な浜言葉なので、半分くらいし

か何を言っているのか分らない。

風呂上りに、「現役の漁師さん？」と聞くと、「そうやで、この人はタイ、わしはハモや」と日焼けした顔でいうと、鼻歌でもでそうな感じで、自転車で颯爽と帰っていった。

令和二年十一月